



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本語「と思う」とウズベク語 deb o 'y layman の対照
Author(s)	日高, 晋介; Hidaka, Shinsuke
Citation	北方言語研究, 16, 215-237
Issue Date	2026-03-20
DOI	https://doi.org/10.14943/2115.99351
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99351
Type	departmental bulletin paper
File Information	12_Hidaka.pdf



日本語「と思う」とウズベク語 *deb o'ylayman* の対照

日 高 晋 介
(筑波大学)

キーワード：モダリティ、談話、日本語、ウズベク語、対照

1. はじめに

本稿は、ウズベク語 *deb o'ylayman* を日本語「と思う」と対照することで、そのモダリティ的意味ならびに談話における特徴を明らかにすることを目的としている。筆者の知る限りでは、ウズベク語の従来の研究では、*deb o'ylayman* をモダリティ表現として扱う研究は見当たらない。日本語の研究では「と思う」がモダリティ表現であるとみなされており (仁田 1991、中右 1979)、森山 (1992, 1995) が「と思う」の用法を二つ (不確実表示用法と主観明示用法) に整理している。生越 (2008) は、森山 (1992, 1995) で挙げられた「と思う」の二つの用法をもとにして、朝鮮語「고 생각하다 ko sayngkakhata」の引用節には、その場で判断内容の真偽を検討しにくい情報、あるいは議論しても結論が出ない情報が現れないことを明らかにしている。

本稿では、まず、ウズベク語の談話コーパスから *deb o'ylayman* の用例を抽出し、それらの用例を引用節の述語形式によって整理して示す。次に、森山 (1992, 1995) と生越 (2008) で明らかになったことをもとに、インフォーマント調査 (*deb o'ylayman* の削除による文の意味変化の有無に関する調査と、作例の容認度調査) を行うことで、*deb o'ylayman* の特徴を明らかにする。これにより、日本語と比べて研究の蓄積が少ない、ウズベク語のモダリティ研究あるいは談話分析の研究に貢献する。調査の結果、不確実表示用法と主観明示用法の作例は一部が許容できないと判断された。以上の結論として、*deb o'ylayman* は、話し手の直接体験や知覚などによって確実な情報として認識した内容には用いられにくい、話し手の直接体験や知覚などによらない判断には用いられることを明らかにした。したがって、*deb o'ylayman* の用法は、日本語「と思う」よりも制限されていると言える。この原因は下記の二つにある: 1. 動詞語幹 *o'yla-*には「思う」のほかに「考える」という意味もあること、2. 日本語の会話では他の要素を伴わない終止形で文を終えることはまれであるが、ウズベク語では動詞が他の要素を伴わなくても話者の意向や聞き手への働きかけを示せること。

本稿の構成は次のとおりである。2 節で先行研究について概観した上で、問題提起を行う。3 節では、コーパス調査とインフォーマント調査それぞれの方法と結果を述べ、4 節では、3 節での調査の結果をもとにして考察を行う。最後に、5 節で調査結果をまとめたうえで、結論と今後の課題を述べる。なお、本稿における例文番号・グロス・日本語訳は、ことわりのない限り筆者によるものである。ウズベク語の表記には、ラテン文字正書法を一貫して用いる。

2. 背景知識・先行研究・問題提起

2.1 節で、ウズベク語 *deb o'ylayman* の意味・機能を確認する。2.2 節では日本語「と思

う」の機能について、2.3 節では朝鮮語 *ko sayngkakhata* と日本語「と思う」との対照研究について、それぞれ先行研究の記述を概観する。最後に、2.4 節で問題提起を行う。

2.1 ウズベク語 *deb o'ylayman* の意味・機能

日本語に翻訳すると、*deb* は「と」に、*o'ylayman* は「思う」に、それぞれ相当する。

下記 (1) に *deb o'ylayman* の具体例を挙げる (日本語訳の後に付した出典情報は、3.1.1 節で説明する)。*deb* は *de-*「言う」を意味する動詞語幹に副動詞接辞 *-b*「～して」が付加された語である。したがって、*deb* は「言って」と直訳できる。本稿では、*deb* の前に思考内容を表す節 (以下、引用節と呼ぶ) が置かれ、*deb* の後に *o'yla-*「思う」が続く場合を取り扱い、この場合の *deb* を引用マーカとみなす。なお、(1) における思考内容は *ijtimoiy hayot-ga qarat-il-ma-yap=ti*「社会生活に注目していない」である。*deb* に続く *o'ylayman* は、「思う、考える」を表す動詞語幹 *o'yla-*、非過去時制を表す接辞 *-a*、一人称単数を表す人称接語 *=man* によって構成されている。したがって、次節で詳しく見るように、日本語「と思う」と並行した構造を持つと言える。

- (1) *ijtimoiy hayot-ga qarat-il-ma-yap=ti* *deb* *o'yla-y=man*.
social life-DAT direct-PASS-NEG-PROG=3 QT think-NPST=1SG

「(我が国の経済変化は、主にニュースや選挙などに注目しており、) 社会生活に注目していないと思います。」(20241223_01_B_76²)

ただし、筆者が知る限りでは、日本語の「と思う」のように、モダリティを表す要素あるいは談話上の機能を持つ要素としてウズベク語の *deb o'ylayman* を位置付ける研究は見当たらない。

2.2 日本語「と思う」の機能

本節では、森山 (1992) による記述をもとに、「と思う」の機能について述べる。森山 (1992) は、仁田 (1991) と中右 (1979) での議論を踏まえたうえで、「と思う」の前に位置する引用節に焦点を当てて分析し、「と思う」の意味用法ならびに他の推量形式との差異について検討している。その検討の結果、「と思う」の基本的意味は「個人情報の表示」という点でまとめられるとしている (森山 1992: 113)。なお、森山 (1992) の言う「個人情報」とは、個人を特定するような情報 (住所や電話番号など) ではなく、「ある事態に対する話し手の判断」を指すと考えられる。

まず、先行研究である仁田 (1991) と中右 (1979) による「と思う」の記述をそれぞれ概観する。仁田 (1991: 58) は、下記 (2) の「と思う」は「[非過去、非否定、「思う」の一人称の省略]といった条件の元でモダリティ形式化していった例である」としている。つまり、仁田 (1991) は、「と思う」を疑似的にモダリティを表す形式 (仁田 1991 の用語でいえば

¹ 中嶋 (2015b: 284) では、*o'yla-* の項に「①考える、思う」という意味が書かれている。

² カッコ内の情報は談話コーパスの出典情報である。詳細は脚注 13 を参照されたい。

「疑似モダリティ形式」) であると捉えている。

(2) 彼は間違っていると思う。(仁田 1991: 58)

さらに、この場合の「と思う」は「～だろう」に近似してくると述べている。ただし、下記 (3) に示すように、「～だろう」は心内発話や独り言として成り立ちうるが、「と思う」は対話状況でしか使えないという。

- (3) a. 明日は雨になるだろう。
b. 明日は雨になると思う。(仁田 1991: 58³)

したがって、仁田 (1991) は、「と思う」について、対話状況でしか使えない疑似的モダリティを表す形式であるとみなしている、と言える。

中右 (1979: 248) は、モダリティは「発話時という習慣的現在における話し手 (および、ときに聞き手) の心的態度である」とみなし、さらに「…、モダリティは、テンス・アスペクト、真偽、否定、疑問、省略、補填、代用などの作用域にはなく、また、その対象ともならない」としている。中右 (1979: 248) は、次の (4) と (5) を根拠に挙げながら、「と思う」をモダリティ表現として捉えている。中右 (1979: 236) によれば、(4) の「思う」「思わない」の主体はいずれも発話者であり、(4b) の否定「ない」は話者の思考作用を否定しているのではなく、思考内容の一部、つまり、「アンが正直である」という命題を否定している。

- (4) a. アンは、正直でないと思う。
b. アンは、正直だと思わない。(中右 1979: 236⁴)

さらに、中右 (1979: 237) は、「と思う」がモダリティ表現ととらえられる傍証として、「と思っている」の例 (5) を挙げ、(5) における思考作用の主体は、発話者、アン、アン以外の第三者である可能性があるとしている。したがって、「と思っている」は、話し手以外の心的態度を表すこともあるため、モダリティ表現にはなりえない。

- (5) a. アンは、正直でないと思っている。
b. アンは、正直だと思っていない。(中右 1979: 237)

以上で概観したように、森山 (1992) 以前の研究でも、「と思う」は、対話場面における発話時現在の話者の心的態度を表すモダリティ形式である、とみなされている。

³ (3) は、仁田 (1991) では漢字カタカナ表記であるが、本稿では他の例との統一を図り漢字ひらがな表記に書き改めている。

⁴ 中右 (1979) では例文中の「と思う」はローマ字で表記されているが、本稿ではひらがな表記に改めている。

森山 (1992: 106) は、仁田 (1991) と中右 (1979) をはじめとする、従来の研究の問題点として、「と思う」という形式が具体的にどのような意味用法を持つのかという問題や、ほかの推量形式との違いを含めて文末の表現としていかに位置づけられるのかといった問題については、まだ十分な検討がなされているとは言い難い。」と述べている。

森山 (1992) による結論を先に述べると、「と思う」の基本的意味は「個人情報の表示」という点でまとめられ、さらに二つの用法 (不確実表示用法と主観明示用法) を持つという (森山 1992: 113)。本節末で述べるように、ここで言う「個人情報の表示」は「ある事態に対する話し手の判断を明示すること」と言い換えられる。

二つの用法のうち一つは、引用節の内容が聞き手にも共有されるべき情報でありつつ、その確実性が十分でないことを示す不確実表示用法である。この用法の「と思う」の例として、森山 (1992: 106) は次の会話を挙げている。

(6) 「あいつ、大学、来てるかな。」

「はあ、来てると思います。」 (森山 1992: 106)

(6) の「来てると思います」は、推量を述べているという点で「来てるでしょう」とほとんど違いがないが、「来てます」は、推量を表す形式がないために命題を既成事実として断定的に述べることになる。このことから、(6) のような「と思う」は、発話者が当該命題を確実なものとして確定できないことを示す用法だと言える。

ただし、不確実表示用法の「と思う」と推量表現とは、明確に異なる点もある。例えば、知っていたが忘れたような場合、つまり、自分で停めた車の駐車場所がわからなくなってしまったような状況では、推量表現を用いた (7a) は不適切であるとし、あえてこう言うならばあたかも他人が駐車したようなニュアンスになるという (森山 1992: 108)。

(7) a. #あのあたりに停めたに違いない／かもしれない⁵。

b. あのあたりに停めたと思う。 (森山 1992: 108⁶)

副詞「確か」も、命題を確実な事実として断定せず確信度を留保することを表す「と思う」となじみやすい。森山 (1992: 108) は、「「確か」には、単に不確実なことを表すというのではなく、もともと確実に把握されていたことを不確実なこととして取り上げるという用法がある」と述べ、(8) を挙げ、「と思う」の用例 (8b) のほうが推量表現の用例 (8a) より明らかに自然だと思われるとしている。

(8) a. ?確か、その日は日曜日だったに違いない／だろう。

b. 確か、その日は日曜日だったと思う。 (森山 1992: 108)

⁵ 筆者の感覚では、(7a)「かもしれない」も可能であり、必ずしも他人が駐車したニュアンスが感じられないように思う。「～かもしれない」と「と思う」の違いは、記憶の確かさの度合に違いがある可能性がある。

⁶ #は特殊な文脈なしでは不適切であることを示す (森山 1992: 106)。

以上から、森山 (1992: 108) は、「と思う」が使われる場合の一つとして「話し手が直接確認できたようなことであって、かつ、確実なこととして断定しがたいこと (例えば、記憶が不確かな場合など) であれば、「だろう」などの推量の形式を使って表現することができず、その代わりに「と思う」しか使えないことになる」と述べている。

森山 (1992) は、「と思う」のもう一つの用法として、主観明示用法を挙げている。(9) と (10) に例を挙げる。この用法の場合は、不確実なことを表すというよりも、個人的な意見であることを示すという意味になっている。

(9) 日本の今の医療制度は間違っていると思う。(森山 1992: 110)

(10) 戦後の正しい教育を受けた若者に正しい判断をしてもらわなければならないと思います。(森山 1992: 110)

上記 (9) と (10) は、「と思う」がなくても医療制度や教育に対する判断を述べる文として成立する。したがって、「と思う」はその判断が話し手個人の見解であることを明示する機能を持つと言える。さらに、典型的な例として、下記の (11) と (12) を挙げている。

(11) 乾杯したいと思います。(森山 1992: 110)

(12) どうか今後も末永く、ご主人とともに当店の商品テストを続けていただきたいと思います。(森山 1992: 110-111)

この場合も「と思う」が不確実を表示するわけではなく、むしろ、個人的な意見、主張であることを断ることによって、主張を和らげるという談話上の機能を有しているとしている (森山 1992: 111, 112)。

以上、森山 (1992) による「と思う」の分析を概観した。森山 (1992) は、「と思う」の基本的意味が「個人情報」の表示 (言い換えれば「話し手による判断を明示すること」) にあるとし、用法としては不確定表示用法と主観表示用法の二つの用法がある、と結論づけている。

2.3 朝鮮語 *ko sayngkakhata* と日本語「と思う」との対照

生越 (2008) は、朝鮮語 *ko sayngkakhata* と日本語「と思う」の対応関係を、日本語の研究 (森山 1992, 1995) を参照しながら、明らかにした研究である。本稿は日本語の「と思う」と他言語の対応形式との関係を明らかにする研究であるため、生越 (2008) による記述は本稿への示唆となりうる。したがって、本節にてこれを参照することにする。なお、朝鮮語の引用格助詞 *ko* は「と」に、動詞の *sayngkakhata* は「思う、考える」に、それぞれ相当する。

下記の表 1 は、生越 (2008) によって示された日本語「と思う」と朝鮮語 *ko sayngkakhata* の対応関係を筆者がまとめたものである。不確実表示用法と主観明示用法は、2.2 節で述べたように森山 (1992) によって提案された用法であり、未知推測と直接経験忘却は森山 (1995: 173) が提案しているラベルである。先に挙げた用例で言えば、未知推測は推測を表す (6) 「はあ、来てると思います。」に、直接経験忘却は直接経験に基づく判断でありながら、その記憶が曖昧であることを表す (7) 「あのあたりに停めたと思う。」に、それぞれ該当

する。主観明示用法のうち、話者限定情報と他者共有情報は生越 (2008) によって提案されたものである⁷。他者共有情報は聞き手を含む第三者も何らかの情報をもちうる事柄を指し、話者限定情報は話し手だけが知っているが他者は知らない情報を指す。なお、表中の (13)–(16) は、対応関係を一覧するために先取りして掲げるものであり、例文の提示および検討は表 1 のあとに行う。

表 1: 日本語「と思う」と朝鮮語 ko sayngkakhata の対応関係

		例	朝鮮語 ko sayngkakhata の使用可否
不確実表示用法	未知推測	(13) 今日は雨が降る <u>と思います</u> 。	×
	直接経験忘却	(14) 先週の日曜日は雨が降った <u>と思います</u> 。	○
主観明示用法	他者共有情報	(15) 日本の今の医療制度は間違っている <u>と思う</u> 。	○
	話者限定情報	(16) (昨日見た映画のパンフレットを見ながら) この映画は昨日見たけど、とても面白い <u>と思う</u> 。	×

表 1 に示したように、生越 (2008) は日本語「と思う」と朝鮮語 ko sayngkakhata の対応関係について、次の 2 点の差異があるとしている：1. ko sayngkakhata と「と思う」は、話者の判断を示す点で共通しているが、ko sayngkakhata には「と思う」が示す推量の意味が見られないこと、2. ko sayngkakhata は判断内容に他者共有情報が含まれていることが必要であるが、「と思う」はそのような制限がないこと。

以下では、ko sayngkakhata と「と思う」の対応関係について、表 1 の不確実表示用法と主観明示用法として挙げられている用例を参照する。まず、不確実表示用法のうち、未知推測を表している用例 (13) を示す。この場合、「と思う」は「でしょう」「だろう」に置き換えられるが、朝鮮語では、ko sayngkakhata に対応せず、推量を表す表現が対応する (生越 2008: 49)。

(13) a. 今日は雨が降ると思います。

b. ?오늘은 비가 온다고 생각합니다.

? onul-un pi-ka o-ntako sayngkakha-pnita. (生越 2008: 49⁸)

他方、不確実表示用法の直接経験忘却は、判断内容⁹が既知であり、「と思う」は「にちがい

⁷ 小野 (2001: 25-26) は「と思う」の対象とする思考タイプには、共有思考タイプと個有思考タイプの 2 種類があるとしている。共有思考タイプは、話し手の思考内容を聞き手も判断可能だと話し手が判断するものである。それに対し、個有思考タイプは、話し手の思考結果を聞き手に働きかけるものである。したがって、共有思考タイプと個有思考タイプは、生越 (2008) の提案した、他者共有情報と話者限定情報に、それぞれ相当すると考えられる。

⁸ 生越 (2008: 54) によれば、インフォーマント (5 名、一部 4 名) が全員及び一人を除く全員が使えないと判断した文には ? をつけたという。

⁹ 生越 (2008: 49) は、「と思う」の前接部分の内容を「判断内容」と呼んでいるが、森山 (1992: 107) は同内容を「情報内容」と呼んでいる。

ない」「だろう」に置き換えられない (森山 1995: 173)。この場合、朝鮮語では、未知推測 (13) とは異なり、(14) に示すように、*ko sayngkakhata* を用いることができる。

(14) a. 先週の日曜日は雨が降ったと思います。

b. 지난주 일요일은 비가 왔다고 생각해요.

cinancwu ilyoil-un pi-ka wass-tako sayngkakhayyo. (生越 2008: 50)

以上より、不確実表示用法でも、判断内容が未知か既知かで、「と思う」と *ko sayngkakhata* の対応関係が異なっていることがわかる。生越 (2008: 50-51) は、「未知の内容について判断するのは、推量ということになるのに対し、既知の内容についての判断は再確認であり、推量とは異なる。ここでの分析から「고 생각하다 ko sayngkakhata」は、推量にかかわるモダリティ的な意味を持たないといえるだろう。」(下線は筆者による) と述べている。

次に、主観明示用法について述べる。この場合、「と思う」があってもなくても、ある事象に対する話し手の判断を述べている点は同じであり、これが「不確実表示用法」と大きく異なる点である (森山 1992: 110)。(15) に示すように、「と思う」に対しても *ko sayngkakhata* が対応することから、*ko sayngkakhata* に話し手の個人的な意見を表す主観明示用法があると言える (生越 2008: 51)。

(15) a. 日本の今の医療制度は間違っていると思う。(森山 1992: 110)

b. 일본의 현재 의료제도는 잘못되었다고 생각해. (生越 2008: 51)

ilpon-uy hyencay uylloceyto-nun calmostoy-ess-tako sayngkakhay.

しかし、「と思う」が同じ主観明示用法で使われているにもかかわらず、(16) に示すように、*ko sayngkakhata* が使えない、あるいは使いにくい場合がある。(16) が話者限定情報を表しているならば、この文は発話時までに聞き手が映画を見ていない状態で発話されていると考えられる。この場合、インフォーマントによると、「面白い」に相当する表現を使うという (生越 2008: 51)。

(16) a. (映画のパンフレットを見ながら) この映画は昨日見たけど、とても面白いと思う。

b. (?)이 영화는 어제 봤는데 아주 재미있다고 생각해.

(?) i yenghwa-nun ecey pwass-nuntay acwu caymiiss-tako sayngkakhayyo¹⁰. (生越 2008: 51)

生越 (2008: 51) は、(15) と (16) を比べると、文の判断内容 (引用節) に含まれる情報の性格に違いがあるという。(15) に含まれる判断内容自体は話者の主観的な判断ではあるが、「医療制度はどうなっているか」については聞き手など他の人も何らかの情報を持っていると考えられる。つまり、他者とも共有可能な情報、言い換えると他者共有情報も含まれているとみられる (生越 2008: 52)。一方、(16) の判断内容に含まれる「映画を見た。この映

¹⁰ 文末のハングルと翻字が一致しないが、これは原文ママである。

画は面白い」という情報は、話し手だけが知っていて、他者少なくとも聞き手は知らない事柄である。つまり、この場合、判断内容全体が話し手の個人的な情報、言い換えると話者限定情報で構成されている (生越 2008: 51-52)。

以上の分析から、「고 생각하다 ko sayngkakhata」が使いにくい条件として、以下の条件が明らかとなった。

- ① 判断内容が未知の事柄のとき
- ② 話者の知り得る情報のみで他者が共有できる情報を含まないとき

上の二つの条件に共通するのは、その場で判断内容の真偽を検討しにくい、議論しても結論が出ないという点である (生越 2008: 52)。その理由として、生越 (2008: 52-53) は、「朝鮮語の動詞「생각하다 sayngkakhata」が日本語の「思う」のほか「考える」に対応することが多く、「고 생각하다 ko sayngkakhata」が気分的な判断ではなく思考過程を経た判断を示すという意味合いが「と思う」より強いのかもしれない」ということを挙げている。

2.4 問題提起

筆者が構築した談話コーパス¹¹でウズベク語の談話には、日本語「と思う」に相当する構造である *deb o'ylayman* が頻繁に現れる¹²。引用節の述語に注目すると、(17) には現在進行を表す定動詞 *qarat-il-ma-yap=ti* 「注目していない」が用いられ、(18) には認識モダリティを表す形式 *sovuq bo'l-sa ham kerak* 「寒くもなるだろう」が用いられている。なお、コーパス調査の概要と例文末の出典情報については次節で述べる。なお、(17) と (18) の日本語訳の先頭に当該の発話における文脈の説明を付す。

- (17) *ijtimoiy hayot-ga qarat-il-ma-yap=ti* *deb o'yla-y=man*
 social life-DAT direct-PASS-NEG-PROG=3 QT think-NPST=1SG
 「(我が国の経済変化は、主にニュースや選挙などに注目しており、) 社会生活に注目していないと思います。」 (= (1))

- (18) *sovuq bo'l-sa ham kerak* *deb o'yla-y=man*
 cold become-COND also necessary QT think-NPST=1SG

¹¹ 本稿で用いるウズベク語談話コーパスは、筆者が構築している中央アジアチュルク諸語五言語談話コーパス (Central Asian Turkic Discourse Corpus, 略称 CATDiC) の一部を成す (2025 年 3 月公開予定)。CATDiC には、中央アジアチュルク諸語五言語 (トルクメン語 (南西語群)、カザフ語、キルギス語 (ともに北西語群)、ウズベク語、現代ウイグル語 (ともに南東語群) の母語話者 2 名同士の談話が数本収録されており、談話における各発話単位に転記テキスト、日本語訳、英訳、形態素区切りとグロス、談話行為タグが付与され、対話における談話機能を多層的に記述・参照できるようになっている。

¹² 談話 4 本 (計 80 分) から成るウズベク語の談話コーパスで、*deb* の後に動詞が続く例は、*deb ayt-* 「と言う」、*deb eshit-* 「と聞く」、*deb so'ra-* 「と尋ねる」が観察されたが、3 例以上観察されたのは *deb o'ylayman* だけであり、のべ 21 例が観察された。

「(初めて訪れる海で星を見ることを想像しながら、天気は) 寒くもなるだろうと思います。」(20241227_01_B_28)

ただし、2.1 節で述べたように、ウズベク語の研究では、*deb o'ylayman* をモダリティを表す形式あるいは談話上の機能を担う要素として扱う研究は、筆者の知る限りでは見当たらない。

本稿では、森山 (1992, 1995) あるいは生越 (2008) で明らかになったことをもとに、ウズベク語の談話において頻出する *deb o'ylayman* の用例を分析し、この構造の特徴を明らかにする。

3. 調査

3.1 節では、インフォーマントに関する情報と談話コーパスから抽出した用例を示す。3.2 節と 3.3 節では、インフォーマントの協力を得て行った調査について述べる。3.2 節では、*deb o'ylayman* を削除することで文の意味が変化するかどうかについて、3.3 節では、筆者が作例した用例の容認度について、各調査の概要と結果を述べる。

3.1 コーパス調査

3.1.1 節ではインフォーマントに関する情報を示し、3.1.2 節ではコーパスから抽出した用例を引用節中の述語形式によって整理して示す。

3.1.1 インフォーマントに関する情報

以下に、談話¹³に参加したウズベク語母語話者の情報を、ファーストネームの頭文字を取ってアルファベット順に並べる。撮影当時、R は学部生として、B・S・U は大学院の同じプログラムに所属する大学院生として、それぞれ筑波大学に在籍中であった：

1. B: ウズベキスタン・ナマンガン出身、1998 年生、男性
2. R: ウズベキスタン・ホラズム出身、2003 年生、女性

¹³ 本稿では、筆者が構築中である中央アジアチュルク諸語五言語談話コーパス (概要は脚注 11 を参照されたい) のうち、ウズベク語の談話から用例を抽出する。以下、撮影条件と場所、撮影機材、インフォーマント情報、談話情報の順に、談話コーパスの概要について述べる。

談話を撮影・録音するにあたり、談話に参加する二名の話者には次の 2 点のお願いをした：1. 約 20 分間、協力者 2 名に当該の言語で自由に話してもらうこと、2. 個人情報へのマスキングの負担を最小限に抑えるため、個人的な話題はなるべく話さないこと。全てのインフォーマントは筆者による研究の説明を受けたうえで同意書への署名を承諾している。なお、本研究は筑波大学人文社会系研究倫理審査委員会から承認を得ている。録音場所は、筑波大学内にある筆者の研究室あるいは筑波大学東京キャンパス内の教室である。

撮影時には、全体撮影用として、話者二人が画角全体に入るように話者の横に ZOOM 社製 Q8n-4K 一台を設置し、バックアップ用として、身振りが画角に入るように各話者の斜め前に ZOOM 社製 Q2n-4K 一台 (計二台) を設置した。ヘッドマイクは、SHURE 社製 WH20TQG ダイナミック型ヘッドウォーニングマイクロホンを Q8n-4K に接続して使用した。いずれのカメラでも 44.1kHz, 16-bit で撮影を行った。

談話の撮影・録音時間は以下のとおりである。各談話の冒頭に付した談話名は「撮影年月日_整理番号_参加者 1_参加者 2」となっている：1. 20241223_01_B_S: 20 分 33 秒、2. 20241224_01_B_U: 18 分 33 秒、3. 20241227_01_B_R: 19 分 29 秒、4. 20241227_02_U_R: 22 分 11 秒。以下、コーパスからの用例末尾には、「撮影年月日_談話番号_発話者の頭文字_発話番号」という形式で出典情報を付す。

3. S: ウズベキスタン・シルダリア出身、1999 年生、男性
 4. U: ウズベキスタン・アンディジャン出身、1997 年生、男性

3.1.2 引用節中の述語形式による用例の整理

2.3 節で挙げた生越 (2008) では、「と思う」の前接部分の内容によって、朝鮮語 *ko sayngkakhata* の使用可否が明らかとなった。ウズベク語でも、「と思う」の前接部分の内容、つまり引用節全体の意味が *deb o'ylayman* の使用可否に関わる可能性がある。引用節の意味は、述語が取るテンス・アスペクト・モダリティを表す形式によって大きく変化しうる。したがって、本節では述語の形式を基準として整理した上で用例を提示する。本節で扱う用例は、談話コーパスに現れた引用節の述語形式を分類した結果として、次に挙げる範疇に大別される：名詞または形容詞、テンス・アスペクトを表す形式、認識モダリティを表す形式、拘束モダリティを表す形式、証拠性を表す形式。以下、この順に、引用節の述語に下線を付して用例を提示する。

(19) と (20) に名詞または形容詞の例を挙げる。(19) は、この発話の前に、対話相手が「コロナ禍の際に大学や図書館もロックダウンされたおかげで読書量が増え、それが現在プラスに働いている」という旨を話しており、それを受けた発話である。

- (19) *men uchun ham plyus deb o'yla-y=man koronavirus bilan bog'liq*
 1SG for also plus QT think-NPST=1SG coronavirus with related
o'zgarish-lar chunki...
 change because
 「私にとってもプラスだと思います、コロナウイルスに関わる変化は。なぜなら…」
 (20241223_01_S_96)

(20) は、対話相手が「オンラインショッピングについてどう考えるか」と意見を尋ねた後の発話である。

- (20) *Eng yaqin joy-dan bor-ib ol-sa-m yaxshi-roq deb o'yla-y=man*
 most close place-ABL¹⁴ go-CVB take-COND-1SG good-COMP QT think-NPST=1SG
 「最も近い場所で、行って買えたら、よりいいと思います。」 (20241224_01_B_93)

(21) と (22)(= (17)) にテンス・アスペクトを表す形式の例を挙げる。(21) の前には、「自分がウズベキスタンにいたときは雑務に追われて自分の内面について考えることはなかったが、日本に来てからは雑事から解放され自分の内面を観察できるようになった」という旨の発話があった。それに続く同じ話者の発話が (21) である。

¹⁴ ウズベク語では、*ol-*「買う」における場所を名詞句で表す場合、その名詞に奪格 *-dan* が付く。そのため、(20) の日本語訳は「最も近い場所で」と翻訳した。

- (21) *shu taraflama juda ham foydali ket-yap=ti deb o'yla-y=man.*
 that side very EMPH usefully leave-PROG=3 QT think-NPST=1SG
 「その側面はとても有益に働いていると思います。」 (20241227_01_R_163)

- (22) *ijtimoiy hayot-ga qarat-il-ma-yap=ti deb o'yla-y=man.*
 social life-DAT direct-PASS-NEG-PROG=3 QT think-NPST=1SG
 「(我が国の経済変化は、主にニュースや選挙などに注目しており、) 社会生活に注目していないと思います。」 (= (17))

(23) と (24) (= (18)) に認識モダリティを表す形式¹⁵の例を挙げる。(23) の前には、「海を見たことがないが、友人と一緒に見に行く機会がある」という旨の発話があった。それに続く同じ話者の発話が (23) である。

- (23) *birinchi bo'lib okean ko'r-ish-im menimcha men uchun yutuq shekilli deb*
 first as sea see-VN-1SG.POSS in.my.mind 1SG for victory it.seems QT

o'yla-y=man bil-ma-di-m
 think-NPST=1SG know-NEG-PAST-1SG

「初めて海を見ることは、私の考えでは、私にとって勝利であるように思います。知りませんでした。」 (20241227_01_B_21)

(24) の引用節述語には、条件形 *V-sa* と *kerak* 「必要である」が用いられている。この組み合わせ (*V-sa kerak*) は、推量を表す形式である (Kononov 1960: 398)。

- (24) *sovuq bo'l-sa ham kerak deb o'yla-y=man*
 cold become-COND also necessary QT think-NPST=1SG

「(初めて訪れる海で星を見ることを想像しながら、天気は) 寒くもなるだろうと思います。」 (= (18))

(25) と (26) の引用節述語には、拘束モダリティを表す形式が用いられている。(25) では、義務を表す *V-sh kerak* [V-VN necessary] 「～しなければならない」 (Kononov 1960: 399) が用いられている。(25) の前には、富士山についての対話があった。

¹⁵ 本稿では、*shekilli* を「認識モダリティ」を表す形式として扱う。*shekilli* を証拠性の体系に位置づける立場 (Üzüm 2023) もあるが、筆者は、(27) に挙げる証拠性形式 *ekan* と比べて *shekilli* は機能的に異なると考える。具体的には、*shekilli* は mirativity を担わず、物語においても用いられない。チュルク諸語における証拠性を表す形式の特徴として、mirativity については Johanson (2018: 520)、物語における使用には Johanson (2018: 521) を参照されたい。以上の理由から、本稿では *shekilli* を証拠性ではなく、認識モダリティを表す形式として分類する。

- (25) *bahor-lar-da=mi siz-lar ket-ish-lar-dan oldin bir bor-ib qo'y-ish*
 spring-PL-LOC=Q 2PL-PL leave-VN-PL-ABL before one go-CVB put-VN

kerak deb o'yla-y=man
 necessary QT think-NPST=1SG

「春ごろでしょうか、あなたがたが大学を卒業する前に、一度、(富士山に) 行っておかなければならないと思います。」(20241223_01_B_138)

(26) の引用節における述語形式には、可能を表す *V-a ol-* [V-CVB take-] 「～できる」(Ibrahim 1995: 193) が用いられている。(26) の前では、「日本で暮らすにあたって何か質問があるか、あるなら日本滞在は自分のほうが長い」という旨の発話があった。それを受けた同じ話者の発話が (26) である。

- (26) *shu-ning uchun imkon bor-i=cha men javob ber-a*
 that-GEN for possibility existence-3.POSS=ADVLZ 1SG answer give-CVB

ol-a=man deb o'yla-y=man
 take-NPST=1SG QT think-NPST=1SG

「ですので、できる限り、答えられると思います。」(20241224_01_U_24)

(27) の引用節述語には、証拠性を表す形式 *ekan* (Johanson 2018: 516) が用いられている。(27) の前では、前年の同時期と比べて話者自身に違いがあることを述べた上で、(27) では前年の同時期について具体的にどのような違いがあるかについて述べている。

- (27) *masalan o'tgan safdar-da ko'p elementar narsa-lar-ni*
 for.example past time-LOC many elementary thing-PL-ACC

tushun-ma-gan ekan=man deb o'yla-y=man=da
 understand-NEG-PTCP.PAST EVID=1SG QT think-NPST=1SG=EMPH

「例えば、前回は多くの基本的なことは理解していなかったように思いますが。」

(20241227_02_U_39)

以上、本節では、*deb o'ylayman* の前に位置する引用節の述語が様々な形式をとりうることを示した。4 節では、特に認識モダリティと証拠性を表す形式に後続することに注目して考察を行う。

3.2 *deb o'ylayman* の削除による文の意味変化の有無に関する調査

先に 2.2 節において、「と思う」の主観明示用法では、「と思う」を除いても当該の判断が

文として成立することを述べた。本節では、3.1.2 節で挙げたコーパス調査の例文 ((19) から (27)) から *deb o'ylayman* を削除し、それぞれの文の意味に変化がないかをインフォーマントの協力を得て調査する。*deb o'ylayman* を削除した後も判断を表す文として自然に解釈される場合、*deb o'ylayman* は主観明示用法を持つと判断できる。

インフォーマントは、1996 年カシュカダリア生まれの男性であり、彼は談話コーパス内の話者 (3.1.1 節参照) ではない。調査に際し、談話コーパスを見せながら、各例文 ((19) から (27)) における前後の文脈を把握してもらったうえで、*deb o'ylayman* を削除しても各例文に意味の変化がないかどうかを尋ねた。結果としては、(19) 以外の 8 例は *deb o'ylayman* を削除しても意味が変わらないという回答を得た。したがって、*deb o'ylayman* は、少なくとも主観明示用法を持つと言える。ただし、(19) では *deb o'ylayman* を削除することができないと回答した。これについては、4 節で詳しく述べる。

3.3 作例の許容度調査

3.2 節で、*deb o'ylayman* が少なくとも主観明示用法を持つことを明らかにした。ただし、*deb o'ylayman* が不確実表示用法を持つかどうかについては、本稿のデータからは判断できない。そこで、2.3 節の日本語の「思う」と朝鮮語 *ko sayngkakhata* の対応関係を参照しながら、筆者がウズベク語文を作例し、インフォーマントにその許容度について尋ねた。本節の許容度判断は、3.2 節と同一のインフォーマントに依拠する。これは、作例間の許容度を同一の判断基準で比較するためである。複数のインフォーマントによる検証は今後の課題とする。作例は、不確実表示用法の未知推測と直接経験忘却それぞれ 2 例、主観明示用法の他者共有情報と話者限定情報それぞれ 1 例、合わせて計 6 例である。表 2 に結果を示す。

表 2: 作例の許容度調査の結果

		「と思う」の例	<i>deb o'ylayman</i> の使用可否	例文
不確実 表示 用法	未知推測	今日は雨が降る <u>と思います</u> 。	?	(28), (29), (30)
		今日、彼は来る <u>と思います</u> 。	○	(30)
	直接経験忘却	自分の自動車はここに停めた <u>と思</u> います。	?	(31), (32)
		先週の日曜日は雨が降った <u>と思</u> います。	?	(33)
主観 明示 用法	他者共有情報	日本の今の医療制度はよくない <u>と思</u> <u>う</u> 。	○	(35)
	話者限定情報	(聞き手はこの映画を見ていない が、昨日見た映画のパンフレット を見ながら) この映画は昨日見た けど、とても面白い <u>と思</u> う。	×	(36), (37)

まず、不確実用法のうち、未知推測の作例を挙げる。(28) は A と B との会話である。B の回答には *deb o'ylayman* が用いられているが、この文の許容度は低い。例文冒頭にある ? は、非文ではないが、あまり使われないと判断されたことを表す。なお、A の文の許容度についてもインフォーマントに確認済みである。

(28) A: *Ertaga yomg'ir yog'-a=di=mi?*
 tomorrow rain rain-NPST=3=Q
 「明日、雨が降りますか。」

B: ? *Ha, ertaga yomg'ir yog'-a=di deb o'yla-y=man.*
 yes tomorrow rain rain-NPST=3 QT think-NPST=1SG
 「はい、明日雨が降ると思います。」

インフォーマントからは、(29) に示すように、推測を表す *V-sa kerak* (cf. (24)) を使ったほうが適切であるという指摘を得た。

(29) B: *Ha, ertaga yomg'ir yog'-sa kerak.*
 yes tomorrow rain rain-COND necessary
 「はい、明日雨が降るでしょう。」

(30) に未知推測のもう一つの例を挙げる。この場合も、A と B との会話である。B の回答に *deb o'ylayman* が用いられており、この文はインフォーマントに許容された。

(30) A: *Bugun Alisher kel-a=di=mi?*
 today PN come-NPST=3=Q
 「今日、アリーシェルは来ますか。」

B: *Ha, u kel-a=di deb o'yla-y=man.*
 yes 3SG come-NPST=3=Q QT think-NPST=1SG
 「はい、今日、彼は来ると思います。」

次に、不確実表示用法のうち、直接忘却の作例を挙げる。(31) の許容度をインフォーマントに尋ねたところ、「不自然である、言い方が優しすぎる」との指摘を得た。

(31) ? *Men mashina-m-ni shu yer-ga qo'y-di-m deb o'yla-y=man.*
 1SG car-1SG.POSS-ACC this place-DAT put-PAST-1SG QT think-NPST=1SG
 「私は自分の車をここに停めたと思います。」

インフォーマントは、(31) よりも自然に解釈可能な文として、(32) を提示した。(32) の述語 *qo'y-gan=di-m=ku* 「私は置いたよね」には、過去完了 *-gan=di* (< *-gan edi* [PTCP.PAST PAST]; Bodrogligeti 2003: 750-754) と、聞き手への注意喚起を表す文末小詞 *=ku* (中嶋 2015a: 163) が含まれている。

- (32) *Men mashina-m-ni shu yer-ga qo'y-gan=di-m=ku!?*
 1SG car-1SG.POSS-ACC this place-DAT put-PTCP.PAST=PAST-1SG=EMPH
 「私は自分の車をここに停めたよね!？」

もう一つ、直接経験忘却の例を挙げる。(33) には *deb o'ylayman* が用いられているが、この文の許容度は低い。

- (33) ? *O'tgan yakshanba kun-i yomg'ir yog'-di deb o'yla-y=man.*
 past Sunday day-3.POSS rain rain-PAST QT think-NPST=1SG
 「先週の日曜日、雨が降ったと思います。」

インフォーマントは、(33) の代わりに、*Osaka-da* 「大阪で」を足した文 (34) を提示し、(34) について「つくばにいたので、大阪の状態は正確にはわからない。そのため、*deb o'ylayman* が用いられる」という旨のコメントを述べた。この場合、この文は直接経験を表しているのではなく、天気情報という他者にも共有されうる情報であるため、他者共有情報を表しているとみなせる。

- (34) *O'tgan yakshanba kun-i Osaka-da yomg'ir yog'-di deb o'yla-y=man.*
 past Sunday day-3.POSS PLN-LOC rain rain-PAST QT think-NPST=1SG
 「先週の日曜日、大阪で雨が降ったと思います。」

3.2 節でも、ウズベク語の *deb o'ylayman* にも主観明示用法があることが明らかになった。本節の調査でも、他者共有情報を含む (35) が許容された。

- (35) *Yaponiya-ning hozirgi tibbiyot tizim-i yaxshi emas deb o'yla-y=man.*
 PLN-GEN now medical system-3.POSS good NEG QT think-NPST=1SG
 「日本の今の医療制度はよくないと思います。」

ただし、話者限定情報では、*deb o'ylayman* を含んだ文 (36) が許容されなかった。この場合、*deb o'ylayman* を含まない文 (37) が許容された。インフォーマントからは、(37) の *edi* [PAST] が欠けると非文になるという指摘を得た。

- (36) * *Kecha bu film-ni ko'r-di-m, shu qiziqarli edi deb o'yla-y=man.*
 yesterday this movie-ACC see-PAST-1SG this be.interesting PAST QT think-NPST=1SG
 [意図した読み: 昨日、この映画を見ました。それは面白かったと思います。]

- (37) *Kecha bu film-ni ko'r-di-m, shu qiziqarli edi.*
 yesterday this movie-ACC see-PAST-1SG this be.interesting PAST
 「昨日、この映画を見ました。それは面白かったです。」

以上 3.3 節の調査結果から、ウズベク語の *deb o'ylayman* は、主観明示用法のみならず、全ての例が許容されるわけではないが、不確実表示用法も持つことが明らかとなった。

4. 考察

まず、本稿における調査の結果をまとめ、考察を述べる。本稿での調査は、大きく二つに分けられる。一つはコーパスを用いた調査である。3.1 節では、談話コーパスから *deb o'ylayman* の用例を抽出し、引用節中の述語形式によってそれらの用例を整理して提示した。この調査により、*deb o'ylayman* は、認識モダリティを表す形式、証拠性を表す形式に後続することから、モダリティを直接担う形式というよりも、話者の意見や判断を談話的に提示する機能がより顕著であると考えられる。

二つ目は、インフォーマントとの協力を得ながら行った調査である。インフォーマント調査はさらに二つに分けて行われた。3.2 節では、3.1 節で提示した各用例中の *deb o'ylayman* を省略しても文の意味が変わらないかどうかを尋ねた。この調査は、「と思う」の主観明示用法で「と思う」を削除しても意味に質的な違いはないという森山 (1992: 110) の記述から着想を得た。この調査により、インフォーマントから、(19) 以外の 8 例は *deb o'ylayman* を削除しても意味が変わらないという回答を得た。したがって、*deb o'ylayman* は、主観明示用法を持つと言える。しかし、3.2 節では、不確実表示用法を持つかどうかまでは検証できなかった。

3.3 節では、不確実表示用法と主観明示用法の例を作例し、その例をインフォーマントに見せて容認度を調査することで、*deb o'ylayman* にどんな用法があるかを明らかにした。結果としては、不確定表示用法のうち未知推測の例 (30) が許容された。

- (30) A: *Bugun Alisher kel-a=di=mi?*
 today PN come-NPST=3=Q
 「今日、アリーシェルは来ますか。」
- B: *Ha, u kel-a=di deb o'yla-y=man.*
 yes 3SG come-NPST=3=Q QT think-NPST=1SG
 「はい、今日、彼は来ると思います。」(再掲)

他方、主観明示用法では、他者共有情報は許容されたが、話者限定情報 (36) は許容されなかった。

- (36) * *Kecha bu film-ni ko'r-di-m, shu qiziqarli edi deb o'yla-y=man.*
 yesterday this movie-ACC see-PAST-1SG this be.interesting PAST QT think-NPST=1SG
 「昨日、この映画を見ました。それは面白かったと思います。」(再掲)

表 3 に、本稿での作例調査の結果を朝鮮語 *ko sayngkakhata* の使用可否 (2.3 節参照) とともに示す。表 3 から次の 2 点が明らかとなった: 1. 主観明示用法のうち、話者限定情報には用いられない、2. 不確定表示用法も持つが、許容度が低い場合もある。

表 3: 作例調査の結果と朝鮮語 *ko sayngkakhata* の使用可否

		日本語 「と思う」の例	ウズベク語 <i>deb o'ylayman</i> の使用可否	朝鮮語 <i>ko sayngkakhata</i> の使用可否
不確定 表示 用法	未知推測	今日は雨が降ると <u>思います</u> 。	? (28)	×
		今日、彼は来ると <u>思います</u> 。	○ (30)	
	直接経験 忘却	自分の自動車はここに停めた と <u>思います</u> 。	? (31)	○
		先週の日曜日は雨が降ったと <u>思います</u> 。	? (33)	
主観 明示 用法	他者共有 情報	先週の日曜日、(話し手の居住 地から遠い) 大阪で雨が降っ たと <u>思います</u> 。	○ (34)	○
		日本の今の医療制度はよくない と <u>思う</u> 。	○ (35)	
	話者限定 情報	(映画のパンフレットを見なが ら) この映画は昨日見たけ ど、とても面白いと <u>思う</u> 。	×	×

上記 1. と 2. から、許容度が低い例をもう一度整理する。結論を先に述べると、引用節で述べられている判断内容が話者にとって確たる情報をもとにしている場合 (28) あるいは話者の直接経験である場合 ((31), (33), (36)) は、*deb o'ylayman* の許容度が低くなる。(28) のように、引用節が天気予報などの確たる情報源に基づく内容である場合、*deb o'ylayman* の付加は不自然となりやすく、許容度が低くなる。

- (28) A: *Ertaga yomg'ir yog'-a=di=mi?*
 tomorrow rain rain-NPST=3=Q
 「明日、雨が降りますか。」

- B: ? *Ha, ertaga yomg'ir yog'-a=di deb o'yla-y=man.*
 yes tomorrow rain rain-NPST=3=Q QT think-NPST=1SG
 「はい、明日雨が降ると思います。」(再掲)

他方、(31), (33), (36) の引用節の内容は話者が直接経験した事柄である。それぞれの用例にある引用節は、(31) *mashina-m-ni shu yer-ga qo'y-di-m* 「私は自分の車をここに停めた」、(33) *O'tgan yakshanba kun-i yomg'ir yog'-di* 「先週の日曜日雨が降った」、(36) *shu qiziqarli edi* 「それは面白かった」である。したがって、引用節が、話者自身にある確たる情報をもとにした内容である場合、あるいは話者による直接経験の内容である場合、*deb o'ylayman* が用いられにくくなる、と言える。

他方、3.1.2 節の (19) に挙げたように、*deb o'ylayman* が削除不可能であると判断された例もある。これは、「コロナ禍がプラスに働いている」という対話相手の判断に同意しているためだと考えられる。この発話の前には、対話相手が「コロナ禍の際に大学や図書館さえもロックダウンされたおかげで読書量が増え、それが現在プラスに働いている」という旨を話していた。さらに、判断の理由を述べるために *chunki* 「なぜなら」が同一の発話内で用いられていることも *deb o'ylayman* が削除できない理由の一つであろう。また、(19) では *men uchun* 「私にとって」が先行している。このような環境では、当該の判断を話し手の判断として提示する *deb o'ylayman* が要求されやすく、削除が難しくなる可能性がある。

(19) *men uchun ham plus deb o'yla-y=man koronavirus bilan bog'liq*
 1SG for also plus QT think-NPST=1SG coronavirus with related

o'zgarish-lar chunki...

change because

「私にとってもプラスだと思います、コロナウイルスに関わる変化は。なぜなら…」

(再掲)

したがって、ウズベク語 *deb o'ylayman* は、話し手の直接体験や知覚などによって確実な情報として認識した内容には用いられにくく、他方、話し手の直接体験や知覚などによらない判断には用いられる、と結論付けられる。(34) *Osaka-da yomg'ir yog'-di deb o'yla-y=man*. 「大阪で雨が降ったと思います」でも、「つくばにいますので、大阪の状態は正確にはわからないから、*deb o'ylayman* が用いられる」というインフォーマントのコメントが得られている。つまり、話者にとって確たる情報ではない判断内容に *deb o'ylayman* が用いられる。

次に、なぜ日本語「と思う」とウズベク語 *deb o'ylayman* の用法に違いが表れるのか、という点について、対照の観点から考察する。表 3 から、ウズベク語 *deb o'ylayman* は、日本語「と思う」に比べて、用法が制限されている。この点について、次の二点に着目して考察する。一つは、動詞語幹 *o'yla-* 自体が持つ意味である。『基本動詞ハンドブック』における「思う」の「全体解説」には、以下のように「考える」との意味の対比が記されている。

「語義 1」から「語義 15」までのすべての「思う」に共通するのは、物事を＜意識する＞（頭に浮かべる／頭に描く）ことを表す点である。類義語には「考える」があるが、「考える」の場合には比較検討、推論など、思考を経たという意味が加わる。

(<https://www2.ninjal.ac.jp/verbhandbook/headwords/思う.html> [最終閲覧日 2026/01/25])

以上の解説から、日本語の「思う」は「考える」のように思考を経たという意味を持たない、と言える。一方、2.1 節で述べたように、*o'yla-* は「思う」だけでなく「考える」の意味も持ち、後者は判断に至る過程 (理由・根拠) を伴って提示されやすい。したがって、(19) のように同一発話内で理由 (*chunki* 「なぜなら」) を挙げつつ意見・感想を述べる場合、その判断を *deb o'ylayman* によって明示する傾向があると考えられる。

もう一つは、日本語の会話では終止形のみで文を終えることはまれである一方で、ウズベク語は動詞の非過去形・過去形のみでも話者の意向や聞き手への働きかけを示せる、という点である。日本語では、メイナード (1993: 119-121) が計 60 分の会話中 (一組 3 分の会話×20 組分) における文末表現を調査した結果、用言の終止形が他の要素を伴わないでそのまま文末表現となったケースは全体の 11.98%に過ぎなかったことを報告している。水谷 (1985: 62) も同様の分析をしている。他方、ウズベク語では、モダリティ的な含意を表す動詞の過去形・非過去形がよく用いられる。Sjoberg (1963: 112) によれば、非過去形は *imperative-subjunctive-optative mode* も表しうるとし、下記の例では、人称を問わず、聞き手への働きかけ ((38), (41))、聞き手や第三者の意向 ((39), (40)) が示されている。

(38) *Kechir-a=siz.*

forgive-NPST=2PL

‘Please excuse me’

(39) *Ye-y=siz=mi?*

eat-NPST=2PL=Q

‘Do you want to eat?’

(40) *Ko 'r-ma-y=di(r)=mi?*

see-NEG-NPST=3=Q

‘Doesn’t (he) want to see?’

(41) *Qara-y=miz.*

look-NPST=3

‘Let’s look!’

談話コーパスでも同様の例 (42) が観察された。(42) は、末尾が動詞の 1 人称複数非過去形 *ko 'r-a=miz* 「私たちは考慮する」である。この場合、提案の含意があると考えられる。この発話の前には、聞き手が話し手に修士論文のテーマを相談しており、公務員の長時間労働の問題が話題になっていた。

(42) *prezident ham gapir-ib chiq-qan shu-ning uchun ko 'r-a=miz*
 president also talk-CVB go.out-PRF that-GEN for look.at-NPST=1PL

「大統領も (公務員の長時間労働の問題について) 話しています。なので、考えましょう。」 (20241223_01_S_70)

動詞の過去形も特殊な含意を表す場合がある。Laude-Cirtautas (1974: 152) によれば、対話の場面で、話者が当該の行為の実現を強く望むか回避したいといった態度を示すとき、過去形が近い将来の行為を表しうるといふ。すなわち、この用法は、対話場面において話者が行為を強い調子で述べる場合に現れ、結果として聞き手への強い働きかけとして解釈される。日常会話でよく使われるのが *ket-di-k* 「行きましょう」であり、聞き手への働きかけを

含意している¹⁶。

(43) *Qani ket-di-k.*

come.on leave-PAST-1PL

「さあ、(私たちは) 行くよ。」(ハルナザロフ 2010: 352)

以上では、日本語は文末が他の要素を伴わず終止形だけで終わることが少ないのに対し、ウズベク語の動詞の非過去形・過去形がモダリティ的な含意を持つことを見てきた。そのために、日本語では「と思う」がモダリティ的な意味も持つようになり、談話上の機能も担うようになっていると考えられる。それに対して、ウズベク語では、動詞の非過去形・過去形自体がモダリティ的な含意を帯びうるため、話者の態度を示すうえで必ずしも *deb o'ylayman* を伴う必要がない場合がある。したがって、*deb o'ylayman* は日本語「と思う」に比べて用法の分布がより制限されている可能性がある。ただし、ウズベク語の動詞非過去形・過去形それら自体が持つ含意と談話中における頻度との関係については、今後の課題として稿を改めて考える必要がある。

5. おわりに

本稿では、談話中に現れるウズベク語の *deb o'ylayman* について、日本語の「と思う」の用法について詳細に検討した森山 (1992, 1995) と、日本語「と思う」と朝鮮語 *ko sayngkakhata* との対照を行った生越 (2008) で述べられた用法をもとに、*deb o'ylayman* の特徴を明らかにすることを目的とした。談話コーパス中の用例を整理し、インフォーマント調査を行った結果、次の二点を明らかにした: 1. *deb o'ylayman* は、認識モダリティや証拠性を表す形式に後続しうることから、モダリティを直接担うというより、話し手の意見・判断を聞き手に提示する機能が顕著である、2. 話者にとって確たる情報あるいは話者の直接経験・知覚がもとになる内容には用いられにくく、反対に、話し手にとって確たる情報あるいは話し手の直接経験・知覚がもとにならない判断には用いられる。一方、日本語の「と思う」は、話し手の確信度の高低に関わらず、話し手の判断を明示できるところに特徴があると言える。

今後の課題としては、二点挙げられる。一つは、*deb o'ylayman* と他の推量表現との違いを明らかにすることである。3.3 節の (29) に挙げたように、インフォーマントからは *deb o'ylayman* ではなく、推測を表す *V-sa kerak* のほうが自然であるという旨の指摘を得たが、本稿ではなぜ *V-sa kerak* のほうが自然であるのかという点までは踏み込めていない。(24) では、*V-sa kerak* のあとに *deb o'ylayman* が現れていることから、両者には何らかの違いがあることが示唆される。二つ目は、4 節末でも述べたように、ウズベク語の動詞非過去形・過去形それら自体が持つ含意と談話中における頻度との関係を明らかにすることである。日本語「と思う」とウズベク語 *deb o'ylayman* の用法の違いが表れる原因として、日本語の会話では、終止形のみで文を終えることはまれであるが、ウズベク語は動詞の非過去形・過去

¹⁶ 過去形の近未来用法は *ket-*「行く、去る」だけに限らない。Laude-Cirtautas (1974: 153) には、*endi qanday qil-di-k?* [now how do-PAST-1PL] 'What shall (=did) we do now?' という用例が挙げられている。

形のみでも話者の意向や聞き手への働きかけを示せることにあることを挙げた。そもそもこの対比が意味を成すには、ウズベク語の談話内で動詞の非過去形・過去形で終わる文がどのような含意で用いられているのかを明らかにし、それらの頻度がどれくらいなのかを調査しなければならない。

謝辞

本稿は、東京外国語大学国際日本研究センター対照日本語部門主催『外国語と日本語との対照言語学的研究』第 45 回研究会「チュルク諸語から見た日本語」(2025 年 12 月 13 日オンライン開催) にて発表した内容を大きく加筆修正したものである。当該研究会への参加を呼び掛けてくださった山田洋平氏に感謝申し上げる。本研究の構想段階で筆者主宰のチュルク諸語研究会にてコメントを下された、アクマタリエワ・ジャクシルク氏、江畑冬生氏、菅沼健太郎氏 (五十音順) にも感謝を申し上げる。また、本稿の調査にご協力いただいたインフォーマントの方、本稿を査読してくださった匿名の二名の査読者、上記の研究会で質問・コメントをくださった方々にも深い感謝の意を述べたい。ただし、本稿における誤りは全て筆者に帰するものであることをおことわりしておく。

なお、本研究は、日本学術振興会科研費 JP24K22461, JP25K00003 の助成を受けている。

略号一覧

-		接辞境界	PASS	passive	受身
=		接語境界	PAST	past	過去
1, 2, 3		1, 2, 3 人称	PL	plural	複数
ABL	ablative	奪格	PLN	place name	地名
ACC	accusative	対格	PN	personal name	人名
ADVLZ	adverbializer	副詞化	POSS	possessive	所有
COMP	comparative	比較	PRF	perfect	パーフェクト
COND	conditional	条件	PROG	progressive	進行
CVB	converb	副動詞	PTCP	participle	形動詞
DAT	dative	与格	Q	question marker	疑問標識
EMPH	emphatic	強調	QT	quotation marker	引用標識
EVID	evidential	証拠性	SG	singular	単数
GEN	genitive	属格	VN	verbal noun	動名詞
LOC	locative	処格			
NEG	negative	否定			
NPST	non-past	非過去			

参考文献

- Bodrogligeti, András J. E. (2003) *An academic grammar of Modern Literary Uzbek*. München: Lincom Europa.
- ハルナザロフ・マムルジョン (2010) 「ウズベク語 (データ: 「アスペクト」)」 『語学研究所論集』 15: 348-354.

- Ibrahim, Ablahat (1995) *Meaning and usage of compound verbs in modern Uighur and Uzbek*. Ph.D. dissertation, University of Washington.
- Johanson, Lars. (2018). Turkic Indirectivity. Aikhenvald, Alexandra. Y. (ed.) *The Oxford Handbook of Evidentiality*. 509–524. Oxford:Oxford University Press.
- Kononov, Andrej N. (1960) *Grammatika sovremennogo uzbekskogo literaturnogo jazyka*. [現代標準ウズベク語文法] Moskva, Leningrad: Izdatel'stva akademii nauk SSSR
- Laude-Cirtautas, Ilse. (1974) The Past Tense in Kazakh and Uzbek As A Means of Emphasizing Present and Future Actions. *Central Asiatic Journal*. 18 (3): 149–158.
- メイナード・K・泉子 (1993) 『会話分析』 東京: くろしお出版.
- 水谷信子 (1985) 『日英比較 話し言葉の文法』 東京: くろしお出版.
- 森山卓郎 (1992) 「文末思考動詞「思う」をめぐって一文の意味としての主観性・客観性」『日本語学』 11(9): 105-116.
- 森山卓郎 (1995) 「ト思ウ、ハズダ、ニチガイナイ、ダロウ、副詞～ø」『日本語類義表現の文法 (上)』 171-182. 東京: くろしお出版.
- 中嶋善輝 (2015a) 『簡明ウズベク語文法』 大阪: 大阪大学出版会.
- 中嶋善輝 (2015b) 『簡明ウズベク語辞典』 大阪: 大阪大学出版会.
- 中右実 (1979) 「モダリティと命題」『英語と日本語と 林栄一教授還暦記念論文集』 223-250. 東京: くろしお出版.
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』 東京: ひつじ書房.
- 生越直樹 (2008) 「日本語「と思う」と朝鮮語「고 생각하다」について」『東京大学 21 世紀 COE プログラム「心とことば—進化認知科学的展開」 研究報告書 日本語と朝鮮語の対照研究 II』 47-54. 東京: 東京大学 21 世紀 COE プログラム「心とことば—進化認知科学的展開」.
- 小野正樹 (2001) 「「ト思ウ」述語文のコミュニケーション機能について」『日本語教育』 110: 22-31.
- パルデシ・プラシヤント (2023) 『基本動詞ハンドブック』
<https://www2.ninjal.ac.jp/verbhandbook/> [2026 年 1 月アクセス].
- Üzüm, Melike. (2023) The Distinction Between Synchronous and Retrospective Inferences in Uzbek: *shekilli* and *-(i)bdi*. *Archiv Orientální* 91(1): 89-111.
- Sjoberg, Andrée F. (1963) *Uzbek Structural Grammar*. Uralic and Altaic Series, Vol.18 Bloomington: Indiana University.

Contrastive Study of Japanese *to omou* and Uzbek *deb o'y layman*

Shinsuke HIDAKA
(University of Tsukuba)

Keywords: modality, discourse, Japanese, Uzbek, contrastive study

This study aims to clarify the features and modal meanings of the Uzbek expression *deb o'y layman* by contrasting it with the Japanese expression *to omou*. To the best of my knowledge, previous studies have not examined *deb o'y layman* as a modal expression, whereas Japanese scholarship has widely analyzed *to omou* from a modal perspective. In addition, Moriyama (1992) has classified the use of *to omou* into two types: uncertainty-marking use and subjectivity-marking use. Furthermore, contrastive research between Japanese and Korean has shown that the Korean quotative clause followed by *ko sayngkakhata* does not include information indicating difficulty in determining true or falsity at that time of utterance, nor difficulty in reaching a conclusion.

First, the study presents examples of *deb o'y layman* drawn from the Uzbek discourse corpus, focusing on the predicate forms in quotative clauses. Second, based on findings from previous Japanese studies on *to omou* and contrastive research on *to omou* and *ko sayngkakhata*, this study examines the use of *deb o'y layman* through consultation with a native Uzbek speaker. These methodological steps clarify the characteristics of *deb o'y layman* and contribute to research on modality and discourse analysis in Uzbek. The study concludes that *deb o'y layman* is difficult to use when the speaker has clear evidence or direct experience; rather it is typically used for judgments that are not based on such information or experience. Consequently, the range of uses of *deb o'y layman* is more limited than that of *to omou*. This limitation may be attributable to the following factors: 1. the verbal stem *o'yla-* can express not only *omou* (“think”) but also *kangaeru* (“consider”), and 2. in Japanese conversation, sentences rarely finish with only a finite form, whereas in Uzbek, sentences can end with finite forms alone, which may express the speaker’s intention or stance toward the hearer.

(ひだか・しんすけ hidaka.shinsuke.gt@u.tsukuba.ac.jp)